【66】

氏　名（国籍）	金（きむ）　牡蘭（もらん）（韓　国）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　4529　号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**「われわれ」のアイルランド** －日本と植民地朝鮮におけるアイルランド文学の〈移動（トランスレーション）〉－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	浜　名　恵　美
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	加　藤　行　夫
副　査	筑波大学准教授	博士（文学）	吉　原　ゆかり
副　査	筑波大学講師	博士（文学）	齋　藤　　一
副　査	筑波大学講師		平　石　典　子

論文の内容の要旨

本論文の目的は，20 世紀前半の日本と植民地期朝鮮におけるアイルランド文学の受容と変容の実態を解明し，同文学がその時空間において「われわれ」－国民的アイデンティティ－の構築と関連して持ちえた意味や機能の考察を通して，翻訳の内包するダイナミズムを多角的な視点から把握することである。

本論文の構成は以下の通りである。

序章
第 1 章　自画像の時代，「ケルト」という他者
第 2 章　差異と同一化，同一化の差異
第 3 章　ある〈翻案の秀作〉の周辺
第 4 章　せめぎあう〈本文〉と　〈注釈〉
第 5 章　「ムーンライティング」はいかにして「夜間暴動」となったか
第 6 章　「愛蘭的沈痛」と「朝鮮的沈痛」の間
第 7 章　〈アイルランド〉への夢と挫折
結章

序章は，「アイルランド文学」，「アイルランド劇」，〈移動〉（本論文では“translation”の訳語として，従来の言語的「翻訳」よりも広義の文化的〈移動〉を使用する）などの用語の定義を行い，先行研究を検討した後，日本と朝鮮において「アイルランド劇」がいかに〈移動〉　したのかを解明する意義について論じている。

第 1 章は，日本の「ケルト」言説に強力な影響を与えたアーノルドの『ケルト文学研究』（*The Study of Celtic Literature*, 1867）を取り上げ，この書物が元来民族学研究として書かれたことに注目し，イギリスの「人

種」的な他者としての「ケルト」が日本において担った役割について考察している。

第2章は，1920年代から30年代までの日本と朝鮮におけるアイルランド文学の流行を扱い，日本の英文学研究・教育における同文学の流行を検証し，この流行の中で朝鮮の留学生たちが独自にアイルランド劇を「われわれ」のものにしていたことを解明している。

第3章は，坪内逍遥がシングの劇『聖者の泉』（*The Well of the Saints,* 1905年初演）を翻案した『霊験』（1914年初演）を取り上げ，その緒言を中心に分析し，『霊験』が完璧な「日本化」により評価される〈翻案の秀作〉であっただけでなく，アイルランド人と朝鮮人の「民族性」を同一視する点においても〈翻案の秀作〉であったことを解明している。

第4章は，グレゴリー夫人の『牢屋の門』（*The Gaol of Gate*, 1906年初演）の翻案，菊池寛作『暴徒の子』（1916年発表，1922年初演）を取り上げ，本文をその〈注釈〉なる諸文とともに分析することにより，菊池によるアイルランド劇の〈移動〉を歴史的コンテクストに位置づけ直している。

第5章は，朝鮮の劇芸術研究会による『牢屋の門』の翻案・上演を扱っている。原作の“moonlighting”という一語が，崔珽宇（チェ・ジョンウ）による朝鮮語訳『獄門』（1932年発表・初演）において「夜間暴動」という語に〈移動〉された経緯を追究し，近代劇の創出を目指し，その過渡的作業としてアイルランド劇に注目した朝鮮の知識人たちが，この〈移動〉に託した期待と成果について考察している。

第6章は，劇芸術研究会が上演した柳致真（ユ・チジン）作『土幕（とまく）』（1933年発表・初演）を扱う。柳はオケイシーの『ジュノーと孔雀』（*Juno and the Paycock*, 1924年初演）を「愛蘭的沈痛」の劇と規定し，模倣して「朝鮮的沈痛」の劇『土幕』を作った。本章では，前者の沈痛から後者の沈痛への〈移動〉を分析し，先行研究に異議を唱え，さらに従来看過されてきた柳の日本語の卒業論文から朝鮮語の新聞記事への〈移動〉に注目し，アイルランド劇の〈移動〉が「われわれ朝鮮人」の構築と関わる様子を具体的に示している。

第7章は，菊池寛や佐藤清が自らをイギリスと位置づけ，馬海松（マ・ヘソン）や崔載瑞（チェ・ゼソ）の朝鮮の青年にはアイルランドの再現を期待した事態を考察している。総力戦体制下，朝鮮語による文学もアイルランド文学に含まれていた抵抗の身振りも禁じられたとき，朝鮮文学が「スコットランド文学」という新たなアイデンティティを持ち出し，抵抗なき「地方色」を提唱せざるをえなくなったことをも確認している。

結章では，第1章から第7章までの成果をまとめ，日本と朝鮮を同時に見据え，その同時代性や文化の交流・連鎖を解明することにより，「西洋文学」の〈移動〉が，実は，帝国日本と植民地朝鮮間の〈移動〉の問題としても注目されるべき領域となると力説している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，東アジアにおける英文学の受容と変容という近年開拓された研究分野の一端として，日本と植民地朝鮮におけるアイルランド文学の〈移動〉の問題を追究し，特にポストコロニアリズムおよびカルチュラル・スタディーズの理論と方法を駆使し，その重層性を新たに解明した密度の濃い研究である。

日本と韓国の先行研究は，当時の政治的状況に関連してアイルランド文学が帝国日本と植民地朝鮮において注目されていたことを認めているが，その関連の細部を検証し，全体的文脈から意義づけをする作業をしていない。本論文の著者はこの事実を指摘し，帝国日本と植民地朝鮮の両方においてアイルランド文学が「文学外」的な価値を含めて注目されたときに，翻訳，翻案，研究，上演された作品・テクスト，それらが被った変容および生産しえた新しい意味を，国民的アイデンティティの構築と関連させて，明らかにしている。

本論文の独創性は，日本と韓国の植民地期研究の近年の新しい動向の中でも看過されてきた，同時代的に両国の近代文学を形成することになった「西洋文学」の〈移動〉の重要性を指摘したことである。さらに，

日本と植民地朝鮮におけるアイルランド文学の〈移動〉の多様な実態と意味作用を追究し，解明したことに本論文の特色がある。本論文の最大の価値は，植民地期朝鮮の当時の新聞メディアを含めた多数の資料調査に基づく実証性にある。言うまでもなく，資料やテクストの読みには著者の解釈が入るが，著者は本論文を通して客観的姿勢を堅持しており，この点も高く評価できる。なお，本論文はアイルランド文学自体に関する新しい知見をもたらすものではないが，アイルランド文学が，東アジアの特定の文脈の中で新たな照明を浴びて，従来とは異なる意味作用を付与されていることは，まさに〈移動〉のダイナミズムを示すものとして評価されてよい。各章の問題設定はいずれも先鋭であり，新たな洞察を示し，著者の優れた資質を物語っている。とりわけ第５章，第６章，第７章の分析と考察は見事である。

以上のように，本論文は力作であるが，問題がないわけではない。「アイルランド文学」，「スコットランド文学」など「英語」で書かれた各文学の言語と文化の多様性については，さらに詳細な検討が必要であろう。

とはいえ，このような課題への取り組みは著者の今後の研鑽に託するところのものであり，日本と植民地朝鮮におけるアイルランド文学の〈移動〉の考察として本論文が達成した成果は極めて優れたものであると判断される。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。